

ルサーン国際戦争と平和博物館
—視覚資料による建物・展示会場および一部展示品の再現—

坪 井 主 税

要 約

本稿は、約100年前にスイス・ルサーン市に実在したルサーン国際戦争と平和博物館(独名 Internationale Kriegs- und Friedensmuseum, Luzern; 仏名 Musée International de la Guerre et la Paix, Lucerne; 英名 International Museum of War and Peace, Lucerne)の建物および展示会場と一部展示品を再現しようとするものである。再現作業は、1902年に設立され1909年まで存在していた、そして今はまったくその姿のない「最初の博物館」のそれらが中心であるが、「第二の博物館」—すなわち、1910年に「最初の博物館」から移転し1919年に消滅した、今建物だけが残っているもの—のそれらについても簡略に行う。本稿は、それらの歴史的事実を視覚的に捉えるために、ルサーン市史料保管所(Stadarchiv Luzern)をはじめ関係諸機関から入手し掲載許可を得た当時の写真や図面を使用する。この点が、同館の成立から消滅までの過程を詳細に文書化した英国の平和史研究者ピーターバンデンダンガン(Peter van den Dungen)の1981年の論文“The International Museum of War and Peace at Lucerne”(Schweizerische Zeitschrift für Geschichte, Vol. 31, pp. 185-202)と本稿が異なる点であり、また同論文を補完するところでもある。

Keywords

ルサーン国際戦争と平和博物館
International Museum of War and Peace, Lucerne
平和博物館または平和のための博物館
Peace Museums of Museums for Peace
ジャン デ ブロッホ
Jean de Bloch

はじめに——本稿の構成について

本稿は、本稿の目的であるルサーン国際戦争と平和博物館の歴史的事実を視覚的に証明する写真や図を、多用している。そこで、本文中でそれらの写真や図に触れる所にはゴシックで**参照《写真》・参照《図》**と記し、また、それらの写真や図の出所については、わざわざ注に起こさなくてもすむように、その下あるいは適当な所に付した。もし、写真に「by the cour-

tesy of Stadarchiv Luzern」であれば、それは、その写真の著作権を持っているルサーン市史料保管所(Stadarchiv Luzern)から好意的な掲載許可を得たという意味である。

以下本文は、次の2項目立てである—1.「最初の博物館」、2.「第二博物館」—そして、消滅。第1項は、細分化して、次の3小項目になる—(1)その設立地・ルサーン、(2)その建物、展示会場および一部展示品の紹介、(3)その来館者数。第2項は細分化せず、現存する建物を瞥見した後、「博物館」消滅の原因に触れる。なお、本文中の注は、第1項では各小項目末に、第2項においては項末に付した。

1. 「最初の博物館」

(1) その設立地・ルサーン

かつて国際戦争と平和博物館が設立されたスイスのルサーン(独 ルツェルン)とはどんな所なのか。予備的な知識として、この都市のことを少し知っておこう。

地理的な条件は、「博物館」が建てられた約100年前も今も、変わっていない。ちょうどスイスがヨーロッパのど真ん中にあるように、ルサーンもスイスのど真ん中に位置している。スイス国内から、そして外国から、多くの人が観光や保養のために訪れる所ということも、変わっていない。今ルサーンの街を歩けば、中世に逆戻りしたのではないかと錯覚させる魅力的な景観と雰囲気がある。有名なカペル橋(Kapellbrücke)を散策すれば、美しい淡緑色のロイス(Reuss)川の流れるところ、市街のすぐ後ろには、かつてローマ総督ピラトの亡霊が住むと恐れられていた岩山・ピラトウスが聳えている。そしてその山頂の展望台からは、ロイス川が流れ込む「四つの森の国の湖」といわれるフィーアバアルトシュテッテ(Vierwaldstätter)湖を眺望することができる。ルサーン市自体の人口は約62,000であるが、外からここを訪れる人の数は、毎年市の人口をはるかに越えている。

今と比べて交通機関が発達していなかった100年前も、ルサーンは外から訪れる人の多い所だった。例えば、「博物館」創設者のジャン デ ブロッホも—当時はポーランドのワルシャワに住んでいたのに—保養のために、数回、ここに来ている。ルサーンは、1902年6月7日の「博物館」開館式—この時はすでにブロッホは没していたのだが⁽¹⁾—に参列したG. H. ペリス(Perris)が、ブロッホの「博物館」設立の地をこのルサーンにしたことに対して、次のような賛辞を贈るような所だったのである—「ピラトウスの雄大な外輪、その背後に聳え立つスタンサーホルン、そして美しき湖水。それらを求めて、それらの直下に存在するヨーロッパの全ての国から毎年数千の人々がここを訪れている。ヨーロッパ中どこを探しても、この地に如く所なし。」⁽²⁾

ルサーンには、外から人を呼び込む景勝のみならず、外からの優れた発想に共鳴する余地も、そこに住む人々の心にあった。1900年9月、ロシア系ポーランド人ブロッホ—彼のロシア名はイワン スタニスラボビッチ ブロッホ(Ivan Stanislavovitch Bloch)—の「博物館」設立構想を聴

いた市の当局者達はすぐさま賛成し、その実現に向けての支援行動を起こした。彼等は、「博物館」建設の資金援助と共に翌1901年の全スイス射撃大会向けに現在建設中のフェスティバルホール(Festhalle)を、同大会終了後、「博物館」に無料貸与することを決め、そして、1900年10月31日には、「ルサーン国際戦争と平和博物館設立発起人会(Das Initiativ-Komitee für das Kriegs- und Friedens-Museum)」を発足させたのである⁽³⁾。この、市長を先頭に銀行頭取、技師2人、軍人2人、ホテル経営者そして弁護士の8人のいずれも市の名士で構成された「発起人会」は、発足からわずか2週間後の1900年11月13日、「博物館」の建設・運営・財政の一切を司る有限会社(Aktiengesellschaft des Internationalen Kriegs- und Friedens Museums in Luzern)となった⁽⁴⁾。この日から、「博物館」設立の具体的活動が始まったのである。ブロッホは、こうしたルサーンの人々と約1年半「博物館」作りの仕事をしたのである。もしヨーロッパに次の大戦争が起きれば、それは、ヨーロッパ社会の崩壊あるいは破滅につながることを大衆に警告しなければ、という信念を持って⁽⁵⁾。

注(1)ブロッホは1902年1月7日ワルシャワで心臓病にて死去。1902年6月7日の開館式には、妻、息子、2人の娘が参列した。

(2)当時英国で月刊誌 *CONCORD* を発行していた有名な平和運動家。引用部分は perris, G. H. *Jean de Bloch and the Museum of War And Peace at Lucerne*, London, International Arbitration Association, 1902, p. 5; “With the noble outline of Pilatus and the Stanserhorn rising in the background, and the beautiful sheet of water, to which thousands of pilgrims resort every year from all parts of the Western world, lying immediately below, it would be difficult to find, in the length and breadth of Europe, a more effective situation.”

(3)この経過については、van den Dungen, Peter, ‘The International Museum of War and Peace at Lucerne’ (*Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, Vol. 31, p. 190)を参照。

(4)「発起人会」8名が連記して1900年11月13日に出した「有限会社」の定款(Statuten)第3条(pp.1-2)と最終頁(p. 11)参照。

(5)このブロッホの信念は(注3)の論文はじめあちこちで引用されているが、原点は、たとえばブロッホの原著を英訳した *Modern Weapons and Modern War* (Being an Abridgment of “The War of the Future in its Technical, Economic and Political Relations” by I. S. Bloch. With a Prefactory Conversation with the Author by W. T. Stead. London, Grant Richards, 1900.)の最終頁(p. 356)の “Such are the consequences of the so-called armed peace of Europe - slow destruction in consequence of expenditure on preparations for war, or swift destruction in the event of war - in both events convulsions in the social order.” および前頁(p. 355)の “Thus, if the present conditions continue, there can be but two alternatives, either ruin from the continuance of the armed peace, or a veritable catastrophe from war.” なお、「ヨーロッパにおける次の大戦争」とは、当時の2大同盟、ドイツ・オーストリア・イタリア軍とフランス・ロシア軍間の戦争のこと。

(2) その建物、展示会場および一部展示品の紹介

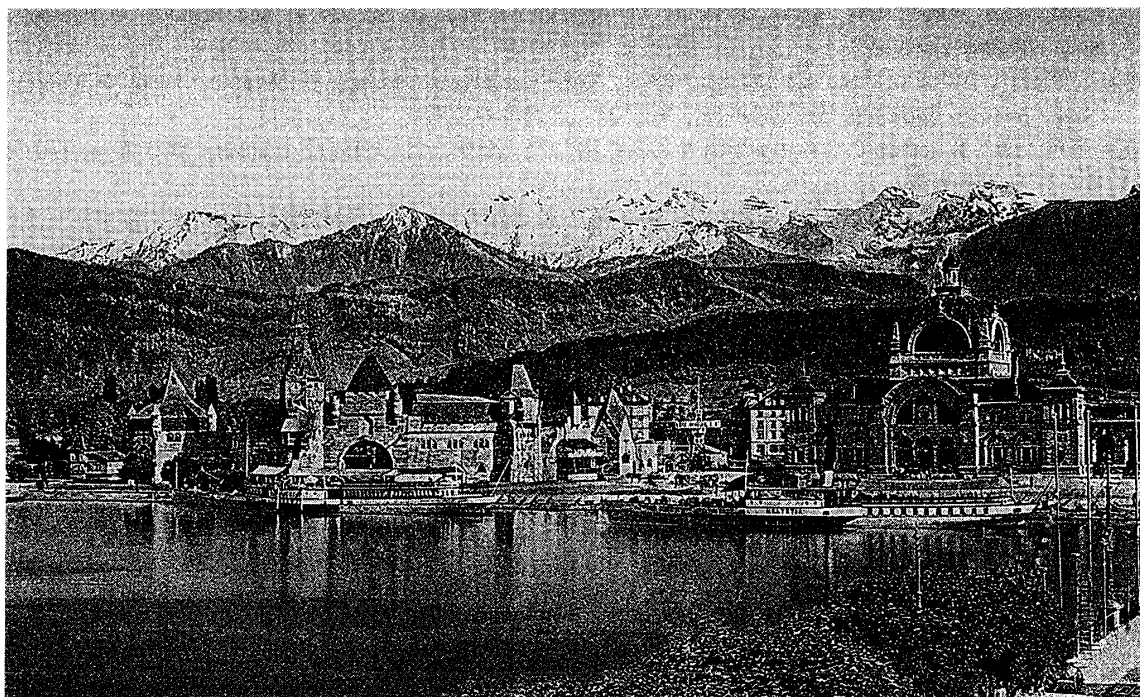
「博物館」が作られることになったフェスティバルホールは、ルサーンのどこにあったのか。それは、ルサーンで最も人の集まる駅(Bahnhof)のすぐ横、そして、フィーアバルトシュ

テッテ湖周辺の他の州の人が遊覧船でやって来る湖畔のすぐ前にあった。1901年時のフェスティバル ホールの位置を今と引き比べながら確認しておこう。参照《写真1》と参照《写真2》は、ともに1993年刊行の写真集『変わりゆくルザーン(so veränderte sich Luzern)』からとったものである。参照《写真1》は1901年のもので、中央から左、中世の城のような建物がフェスティバル ホールである。全部石作りかと思ってしまうが、実際は、大半は木造りで、石や煉瓦が使われているところは外側の部分だけである。駅は、右の、上が円蓋(ドーム)状になっている立派な建物である。参照《写真2》は1993年のもので、駅の形・大きさや遊覧船の乗り場に変化はあっても、1901年の写真とほぼ同じ場所から同じ角度で撮ったものである。かつて8年間「博物館」だったことのあるフェスティバル ホールは、今は、会議場を持つ文化会館(Kunst- und Kongresshaus)になっている。そして、今の文化会館の地名は「ヨーロッパプラザ(Europaplatz)であり、駅の前は「駅プラザ(Bahnhofplatz)」である。昔のフェスティバル ホールの地名は、これと駅の間は何もなかったせい、か、「駅プラザ」であった。

「博物館」ができた後のフェスティバル ホールを見てみよう。参照《写真3》がそれである。これは、「博物館」が開館して3年後の1905年当時のフェスティバル ホールである。外観が、以前と比べて、はるかに立派になっている。真ん中から左が宿泊施設、右が「博物館」で、

参照《写真1》

1901年時のフェスティバル ホール(中央から左、中世の城のような建物)と駅(右端、上がドーム状の立派な建物)



Marcel Nuber, *so veränderte sich Luzern*, Kastanienbaum, 1993, Luzern, p.122より

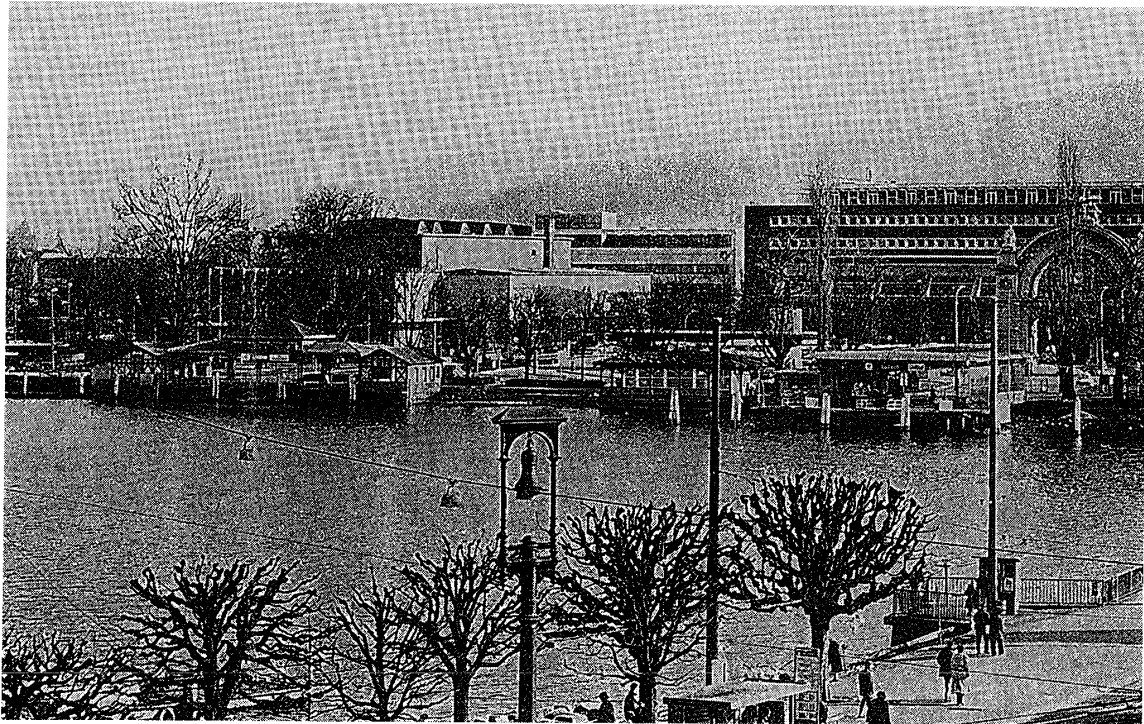
（この写真でははっきり見えないのだが、）「博物館」の前面に「国際戦争と平和博物館」を意味する独語の「Internationales Kriegs & Friedens Museum」の横書きの文字，その下に「入口」を意味する仏語，独語，英語の「Entrée. Eingang. Entrance」がある。

では、「博物館」の展示会場はどこにあり，どのくらいの大きさだったのか。場所は，参照《写真3》で言えば，「Internationales Kriegs & Friedens Museum」とある看板の真後ろに見える横にずっと走っている屋根の建物がそうであった。ここは，「博物館」に改修前は，次の参照《写真4》のように，犬の展示会場としても使われていた所であった。ここを改修して，次の参照《写真5》がその一部を示しているような展示会場としたのである。展示会場全体の大きさについては，確たることは言えない。あれこれと関係の図面に当たってくれたルサーン市史料保管所係官の類推は，おおよそ，縦52.5メートル横47メートル以上であったろうということであった⁽⁶⁾。「馬鹿でかい物置の連続 (a series of vast sheds)」と1902年6月7日の開館式で展示会場を見たジャーナリストが形容したくらいだから⁽⁷⁾，この係官の類推は当たっているように思われる。

この飛行機の格納庫のような展示会場を太い柱と厚い板で仕切りをつけ，領域別展示コーナーを作り，それぞれ仕訳した展示品を陳列したのである。領域別展示コーナーの数は，1902年

参照《写真2》

1993年時の文化会館（昔フェスティバル ホールがあった所）と駅



Marcel Nuber, *so veränderte sich Luzernn*, Kastanienbaum, 1993, Luzern, p.123より

と1903年が19、1904年以降は20と一定していた。変動があったのは、開館以来年々高まってくる「平和コーナー」の拡大要求の声に応えるための展示コーナーの配置替えであった⁽⁸⁾。次の参照《図1》の(1)と(2)は、「博物館」の展示目録(カタログ)の表紙裏に書かれている展示会場図であるが、これを見ると、そのことがよく分かる。参照《図1》の(1)は1902年と1903年時の領域別展示コーナーの配置図で、(2)は、1904年時以降徐々に拡大されていった「平和コーナー」の最も大きかった1909年時のものである。ちなみに、図中の1~20の数字は、図の下に書かれている領域のコーナーがどこに配置されているかを示していて、矢印は「博物館」側が来館者の便宜のために付けた「順路」である。1902年・1903年時の「平和コーナー」は(図中の数字)6, 7, 8, 9, 10の展示コーナーと雑居していたが、1904年以降のそれは、1909年のこの図が示すように、独立した大きなコーナーになった。

参照《写真3》

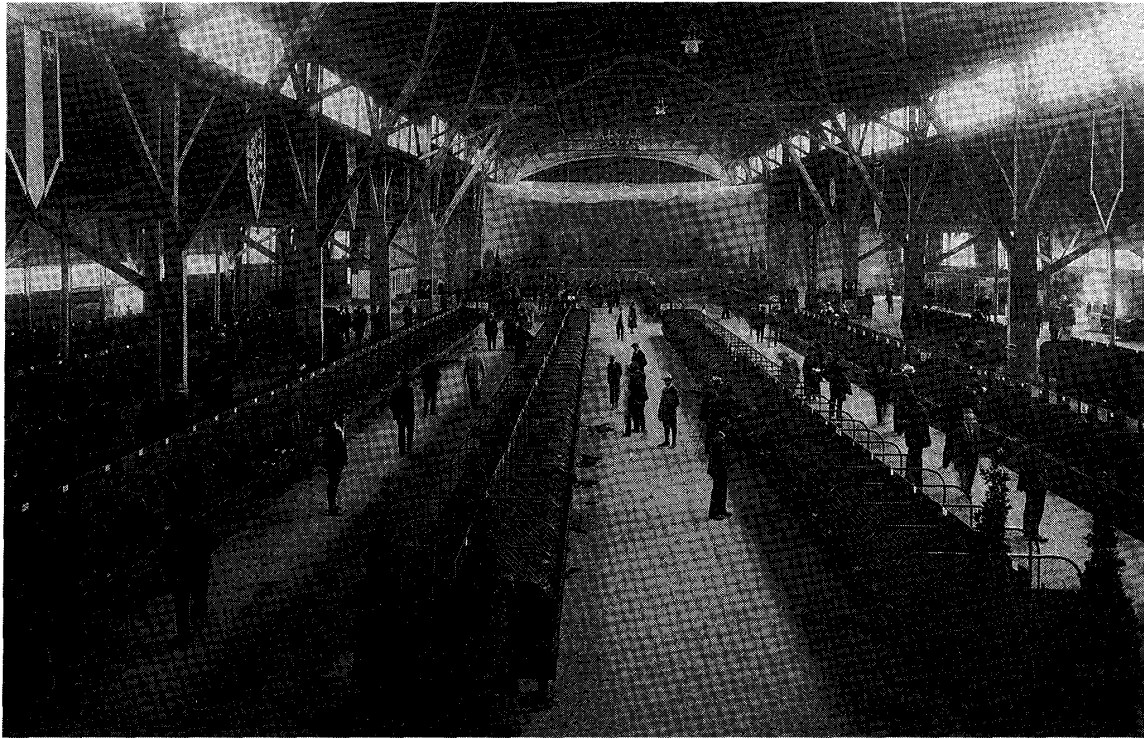
「博物館」となったフェスティバル ホール, 1905年当時(中央左が宿泊施設, 右が「博物館」)



by the courtesy of Stadarchiv Luzern

参照《写真4》

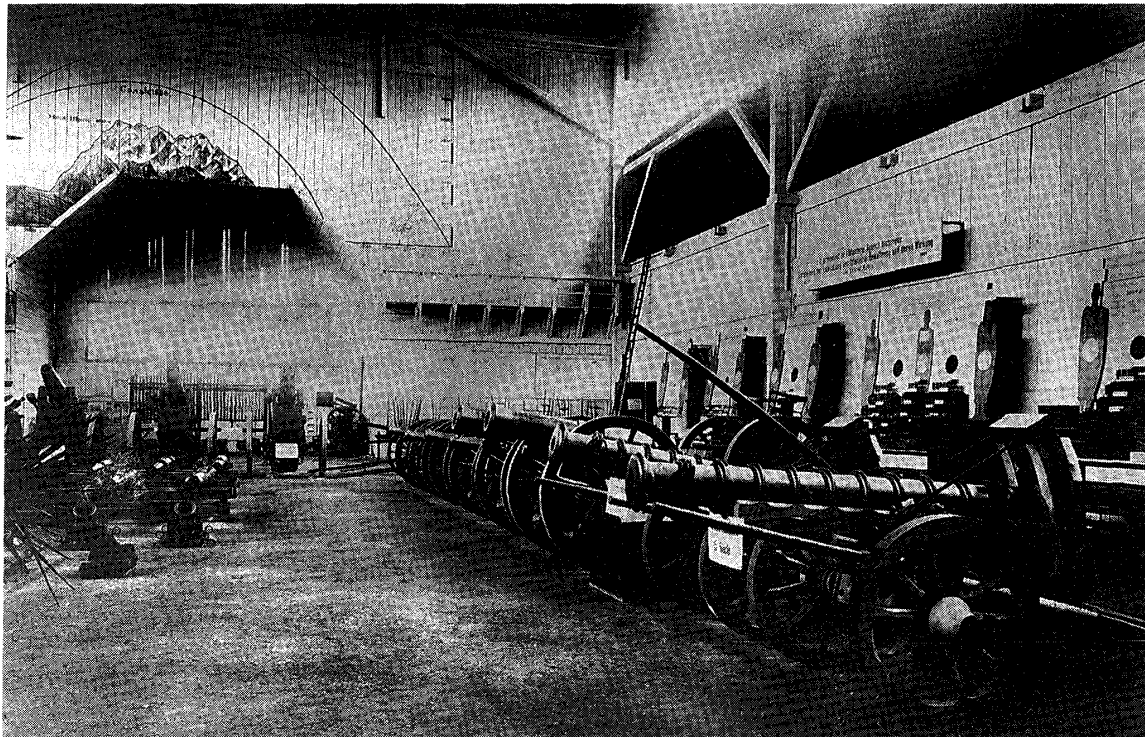
犬の見本会場（あとで、「博物館」の展示会場となった所）



by the courtesy of Stadarchiv Luzern

参照《写真5》

展示会場の一部



by the courtesy of Stadarchiv Luzern

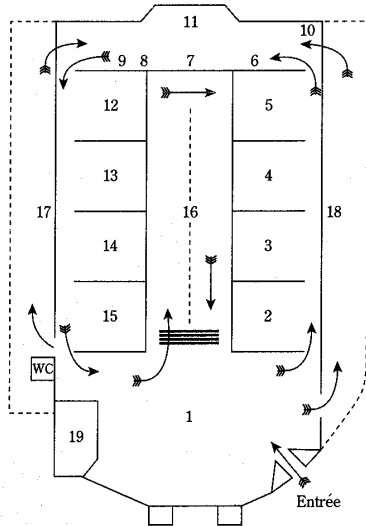
参照《図 1》

領域別展示コーナー配置図

出所は「博物館」発行の伝語ガイドブック Guide du Musée International la Guerre et de la Paix a Lucerne の 1902年版と 1909年版。図下の 1～20の書き方は、原図では縦に一列になっている。

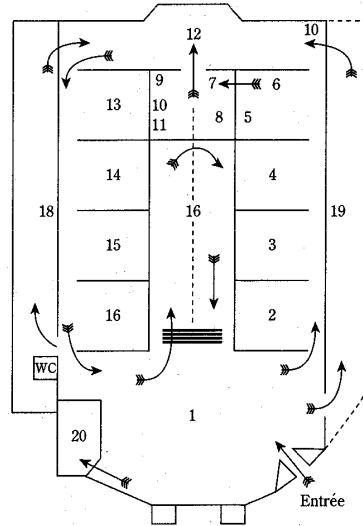
(1) 1902年・1903年時

Plan du Musée.



(2) 1909年時

Plan.



1. 各種兵器 (実物)
2. 古代・ギリシャ時代の戦争
3. ローマ時代の戦争
4. 中世の戦争
5. 30年戦争・7年戦争
6. ナポレオン戦争
7. 普仏戦争 (1870—71)
8. ロシア—トルコ戦争 (1877—78)
・プレブナの戦い
9. ポーア戦争
10. 戦費

11. 平和
12. 要塞の歴史
13. 兵器の殺傷能力の向上・その犠牲
14. 軍隊・軍属施設
15. 海軍力比較
16. 戦場を描いた大絵画
17. 塹壕
18. 橋頭堡・露营地
19. 映写・レクチャールーム

1. 各種兵器 (実物)
2. 古代・ギリシャ時代の戦争
3. ローマ時代の戦争
4. 中世の戦争
5. 30年戦争・7年戦争
6. ナポレオン戦争
7. 普仏戦争 (1870—71)
8. 山上の戦い・(スイス) ユングフラウ山の戦い
9. ロシア—トルコ戦争 (1877—78)
10. ポーア戦争
11. 露日戦争

12. 平和
13. 要塞の歴史
14. 兵器の殺傷能力の向上・その犠牲
15. 軍隊・軍属施設
16. 海軍力比較
17. 戦場を描いた大絵画
18. 塹壕
19. 橋頭堡
20. レクチャールーム

ここで、展示品について一言しておこう。まず、本稿でそのすべてを紹介することはできないということを言わなければならない。なぜなら、展示品の数は、例えば前出の1909年のガイドブック(あるいは目録, リスト)に載っている数で言うと、約4,400—正確には、4,374プラスその他22—もあるからである。従ってここでは、その概略と先の「平和コーナー」用の展示品についてのみ紹介することにしたい。

4,400のうち圧倒的多数は、昔の槍から始まって近代の大砲まで、各時代に使われた様々な武器・兵器である。驚くべきことは、「各種兵器コーナー」だけで、それらは約2,000もあり、その全部が実物だということである。その他は、写真であったり模型であったりする。「海軍力比較コーナー」には、かつての日本の戦艦「三笠」など4隻の写真がある。戦闘場面の模型も結構ある。例えば、(参照《図 1》)の(2)の配置図 7, 8, 9, 10, 11のコーナーに当る)「普仏戦争」「山上の戦い・(スイス) ユングフラウ山の戦い」「ロシア—トルコ戦争」「ポーア戦

争」「露日戦争」には大きな戦闘場面模型がある。絵も少なからずある。参照《写真6》はその一枚で、戦争で目をやられて帰宅した息子を悲しく迎える母を描いた「息子の帰宅(Des Sohnes Heimkehr)」という絵である。戦死した者の頭蓋骨、爆死した馬の骨格などもある。この他、各国の膨大な軍事費や兵器の殺傷能力、それに伴う犠牲の大きさを示した図表がある。これらの展示品は、戦争の恐怖や無意味さを感じさせる手段として展示されたのであろう。

「博物館」の平和に関する展示品は、おおむね、有名人・著名人の肖像画とその一言・著作物といってよい。もちろんこの他にも、オランダの画家ヤン テン ケイト (Jan ten Kate)の、人間の戦争に次ぐ戦争の結果は、やがて人間が骸骨に支配されることだと皮肉った名画「戦争に次ぐ戦争(Guerre a la Guerre)」などもあるが、それらは、全体のごくわずかである。次の参照《写真7》が、このことを証明している。参照《写真7》は、実は、1910年からの「第二博物館」で撮った写真なのである。しかし、この写真が他のどれよりも、先のことを雄弁に語っていると思い、選択をした。写真の真正面がその一連の肖像画である。ちなみに、名画「戦争に次ぐ戦争」は右下の一不鮮明であろうが一大きい絵である。

では、誰が展示されていたか。1902年時には、「博物館」創設者ブロッホ、女流作家で平和

参照《写真6》
「息子の帰宅」(絵)



by the courtesy of Stadarchiv Luzern

参照《写真7》

「平和展示コーナー」の肖像画



by the courtesy of Stadarchiv Luzern

活動家のベルタ ホン ズツナー(Bertha von Suttner), ノーベル平和賞第一号のアンリ デュナン(Henri Dunant)とフレデリック パシイ(Frederic Passy)など7人いた。1909年になると、これが、24人になる。古いところでは、「国際法の父」ユーゴー グロチウス(Hugo Grotius)や英国から米国に渡ったクエイカー教徒ウイリアム ペン(William Penn), 哲学者イマニュエル カント(Immanuel Kant), そして、作家ビクトル ユーゴー(Victor Hugo), 詩人H. W. ロングフェロー(Longfellow), 米大統領セオドア ローズベルト(Theodor Roosevelt)などが前の7人に加わった。これらの人の「平和に向けての一言メッセージ」や著作, および, その他の人—例えば本稿冒頭で引用したH. G. ペリス—の著作などは、「平和文庫(Peace Library)」という新設コーナーの展示品であった。肖像画, メッセージ, 著作, その他一枚の風刺漫画すべて入れて、「平和」関係の展示品は、およそ150点であった。

注(6)同係官 Markus Trüeb 氏は縮尺 1/500の図面を示し、その結果縦52.5メートル横47メートルと割り出したのであるが、その図面には設計者名・設計年月日がなかった。筆者としては係官に同意しているが、ここでは、確たる資料として提出しなかった。

(7)英国のW. T. ステッド(Stead)。彼の記事：“Opening of the Bloch Museum in Lucerne”(The Westminster Gazette, London, 10 June 1902, p. 3) 参照。

(8)前出 van den Dungan, Peter. pp.192-195に「博物館」館長と平和運動家の間の「平和コーナー」を巡るやりとりが詳しく紹介されている。

(3) その来館者数

1902年の開館から1910年にフェスティバル ホールを引き払って「第二館」に移転するまでの8年間に、「博物館」を見た人は何人いたのであろうか。

「博物館」への来館者数は、毎年「博物館」が出す年次総会報告書(Bericht)にその前年度分が載っている。従って、1909年の来館者数は1910年の報告書を見ればよい⁽⁹⁾。次の《表1》は、1903年から1910年の報告書から引き出した各年度の来館者数と8年間の総来館者数である。備考として、「来館者数」欄の右に「開館月」欄を付けておいた。ちなみに、日曜日の開館時間は他の曜日と違うが、一週間休みなく開館していた。

1902年の最初の年が他と比べて少ないのは、やむを得まい。それでも、オープンからたった5カ月で約3万人が来たということは、人々の関心がきわめて高かったと言ってよいだろう。最も来館者数の多かった1905年をとってみると、月平均約8,000を越える人が見に来たことになる。それを日割りすると、一日当りの来館者は、確かに少なくなるのだが、それでも270人である。さらに、この表にはないが、同年の8月だけをとってみると、計10,482人が来館しているので、一日当たり約350人にもなる。このことは、1902年を除くどの年にも言えることで、例えば8月の来館者が8,901人と最も少なかった1906年でさえ、一日平均約300人だったのである。

しかし、ここに大きな問題が横たわっていたのである。7, 8, 9月にルサーン景勝で来る人に依存し過ぎていたという問題である。確かに、「博物館」は8年間でおよそ46万の来館者を得た。だが、そこから、各年7, 8, 9月の来館者数の合計約20万人を引いてみると、26万人に激減してしまうのである。観光や保養でくる人があまりいない月はどうだったのか。ルサーンではまだ寒い3月の場合は、平均約1,000人、一日当たり平均30人であった。一年間通して開いた最後の年1909年の場合、8月は例年通り約1万の人が来たが、1月は約400人、2月も約500人、4月になってようやく2,000人になったが、それでも一日当りにすれば65人である。そして11月はまた、450人に戻り、12月は330、一日10人だった。外からルサーンに来る人がいなくなった時が「博物館」が消える時、と「博物館」関係者は思っていたのではないだろうか。

注(9)1909年の来館者数が載っている1910年の報告書の正式名称は、Bericht des Verwaltungsrates an die X. General-Versammlung =uber das Geschäftsjahr 1909=。以下各年の報告書を使って、数を挙げている。

《表 1》1902年～1909年の年間来館者数

年度	来館者数	開 館 月
1902	29,347	6, 7, 8, 9, 10月
1903	58,873	4, 5, 6, 7, 8, 9, 10月
1904	62,381	4, 5, 6, 7, 8, 9, 10月
1905	65,107	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10月
1906	63,817	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10月
1907	60,957	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10月
1908	56,492	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10月
1909	59,294	1月～12月全部
	計 456,268人	

2. 「第二博物館」—そして、消滅

フェスティバル ホールから移転し、1910年7月15日に「第二博物館」となった建物は、今もこのルサーン市に残っている。ルサーン駅前から市電に乗り、ロイス川をまたぐ湖水橋(See Brücke)を渡り、少し行ったミュージアムプラザ(Museumplatz)で降りて、ムーゼック通り(Musegstrasse)を2, 3分歩いて上がった所に、その建物は立っている。駅から、およそ15分。市電、降りる停車場、歩く通りの名前—それらは、当時と同じである。あえて当時と変わったところを探せば、当時の「博物館」の所在地には地番がなく、ただ「ムーゼック通り」だったが、今は地番が付いて、そこは、「ムーゼック通り9番」となっているということである。

参照《図2》は、当時の「博物館」が作った三つ折りの案内の一片である。現在は、参照《写真8》のように、ルサーン市立フルーマット(Fluhmatt)校という女子寄宿学校になっている。見るからに堅牢な、全長約60メートル奥行き約20メートルのこの建物自体は、90年前に建てられた時のままである⁽¹⁰⁾。入口のうしろの、少し歩道にはみ出している塔の中央に描かれている「青年兵士が、左手で赤いマントを下げ、右手で剣を下げながら、太陽のような円の中に書いてある PAIX (仏語で「平和」の意)を見つめている絵」も、(よく見えないであろうが,)参照《図2》の左端の屋根の直下の四方の壁に描かれている「当時の国々の軍隊旗の絵」—この絵は、各国軍隊がこの「博物館」に参集して、戦争ではなく、平和の話をするということを象徴しているらしいが⁽¹¹⁾—も、当時そのままに鮮明に残っている。

ここで「第二博物館」は、「最初の博物館」の時と同じように、戦争と平和に関する展示品を陳列したのである。「最初の博物館」より、きれいではあったが、手狭になったここに、4,400の展示品全部を陳列し得たかは疑問である。しかし、ここには、次のような、11の領域別展示コーナーがあったのだから、少なくともそのうちの多数は陳列されたとしてよいだろう。

1. 「平和」
2. 「各種兵器 (実物)」

3. 「兵器の殺傷能力の向上・その犠牲・軍属施設」
4. 「ギリシャ・ローマ時代と中世の戦争」
5. 「スイスの戦いの歴史」
6. 「30年戦争・7年戦争・ナポレオン戦争」
7. 「普仏戦争」
8. 「プレブナの戦い・ボア戦争・露日戦争」
9. 「要塞の歴史」
10. 「海軍力比較」

参照《図2》

「第二博物館」の案内（三つ折りの表紙原寸縦13.5cm横9.5cm）

INTERNATIONALES
Kriegs- & Friedens-Museum
LUZERN

MUSÉE INTERNATIONAL
DE LA GUERRE ET DE LA PAIX, LUCERNE



INTERNATIONAL
WAR AND PEACE MUSEUM, LUCERNE

GEÖFFNET		OUVERT	
Werktags 8 Uhr morg.-8 Uhr abends	Sonntags 10 ¹ / ₂ „ morg.-8 Uhr abends	Jours ouvriers 8 h. du matin-8 h. du soir	Dimanches 10 ¹ / ₂ h. du matin-8 h. du soir
Eintritt Fr. 1.—, Kinder 50 Cts.		Entrée Fr. 1.—, Enfants 50 Cts.	

OPEN
On week days 8 a. m. — 8 p. m.
Entrance Fr. 1.—, Children 50 Cts.

On Sundays 10¹/₂ a. m. — 8 p. m.
Children 50 Cts.

Impr. O. J. Bucher, Lucerne

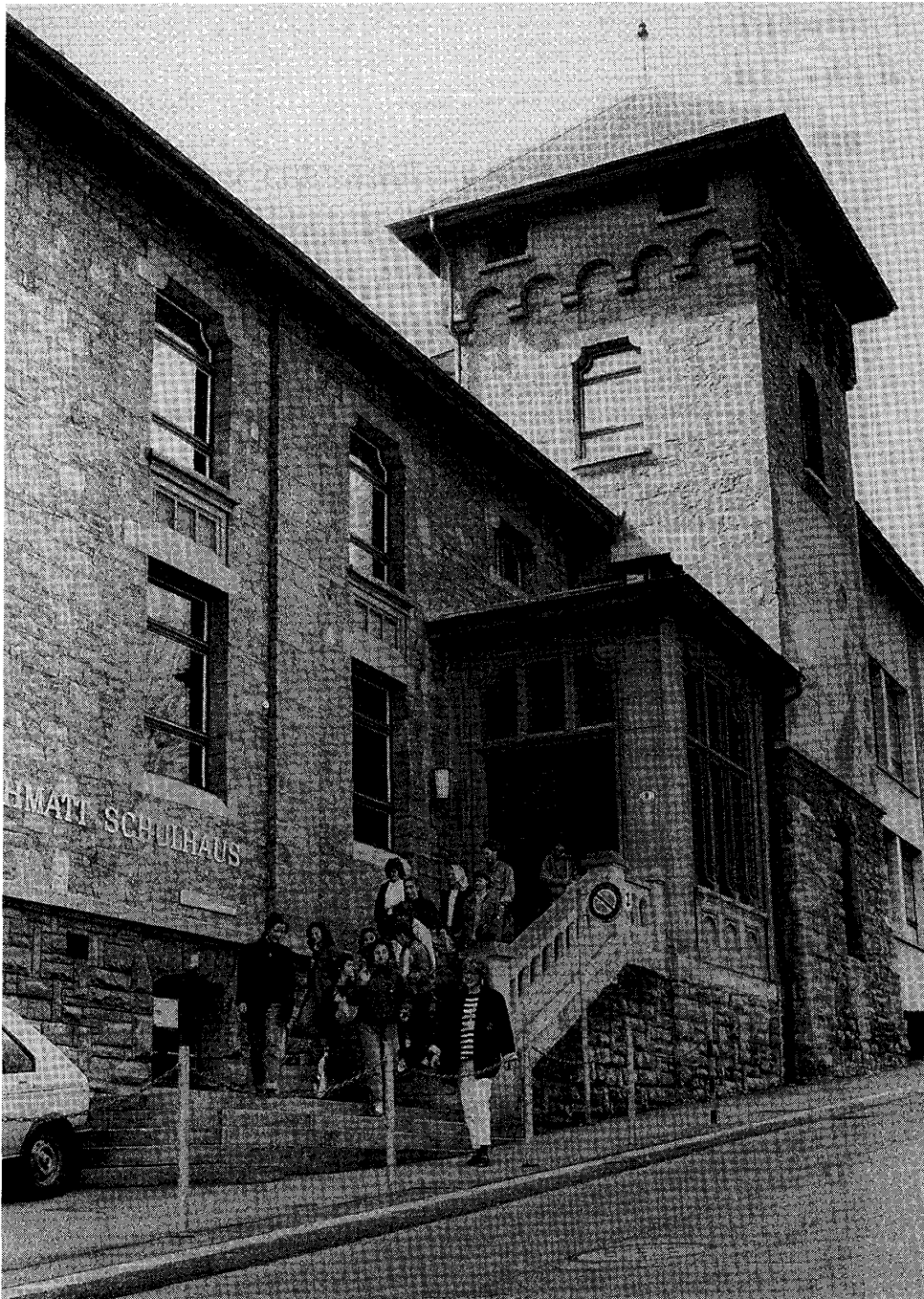
ノルウェー・オスロのノーベル研究所(Nobel Institute)図書館より借用

11. 「戦場を描いた大絵画」

(注. 1～11の並べ方は, 筆者の任意。)

参照《写真8》

「第二博物館」の建物(現在)



by the courtesy of Stadarchiv Luzern

このうち、「平和コーナー」はすでに参照《写真7》でみた。ここでは、「各種兵器(実物)コーナー」を参照《写真9》で見てみよう。陳列されている兵器の数が、前出参照《写真5》で見た「最初の博物館」の数より少なくなっていることが分かる。写真左上にある他の展示コーナーの仕切りの幅もまた、狭くなっている。これらの展示品—そのすべて、と言って差し支えるなかろう—は、今はない。大砲は、溶かされて鉄になってしまったのかもしれないし、本や肖像画や絵は競売に掛けられて、今どこかの家にあるのかも知れないが、その消息は杳として分からない。

1919年7月15日、「第二博物館」は、正式にルサーン市に払い下げられた⁽¹²⁾。理由は財政難であった。買い取った市は、「第二博物館」の負債を減らすべく展示品を売却・整理したのである。こうして、「第二博物館」—否、ルサーン国際戦争と平和博物館—は、1902年6月7日の開館式以来およそ17年間の活動に終止符を打ったのである。

「第二博物館」はなぜ閉館に追い込まれたのか。それには、2つ—根源的には1つであるが—の原因が考えられる。第1は、財政難をもたらした来館者の激減である。次の《表2》「1910年～1919年の年間来館者数」を見てもらいたい。これで分かるように、7、8、9、10、11の5ヶ月間しか開館できなかつた1910年を除いて、次の3年間—1911、1912そして1913年—は、3月から11月までの9ヶ月開館で平均35,000の来館者があつた。「最初の博物館」の5万、6万という数ではなかつたが、それでも、館継続の可能性を残していた。なぜなら、「最初の博物館」の時と違って、今はもう、新しい、恒久的な「博物館」のための土地取得・建物建設にかかる費用を一切心配しなくてよかつたからである。ところが、1914年から、事態は一変してしまつた。そして、1915、1916年と過ぎ、1917年には、館の運営はもはや立ち行かなくなつてしまつた。「博物館」の報告書がこの間の経過をよく物語っている。

報告書は、毎年3月に開かれる年次総会の記録であると前に言つた。そして、そこには前年の来館者数が発表されているとも言つた。1910年から1913年までの来館者数は、それぞれ次年3月の報告書に載っている。言い換えれば、1914年3月には、これまでと同じように、年次総会を開いたということである。ところが、1914年、1915年そして1916年の来館者数を発表するはずの年次総会は、1915年、1916年そして1917年には開かれていなかつた。その3年間の来館者数は、1918年6月—3月ではなく—の23日に、4年振りに開かれた年次総会の報告書に、1917年の来館者数とともに、載っているのである。この報告書の頁数は、たったの10頁である。そしてそこに書いてある1917年度までの累積負債総額は394,017フランであつた。《表2》中、1918年と1919年の「記録なし」は、1918年にはもう、「博物館」が閉館状態であつたことを示しているのである。

「博物館」を閉館に追い込んだ第2の原因は何か。それは、「博物館」が阻止しようとしていたもの、そして、「博物館」がそれが起きればヨーロッパの破滅になると来館者に警告してい

参照《写真 9》

「各種兵器(実物)のコーナー」



by the courtesy of Stadarchiv Luzern

たもの—ヨーロッパにおける第1次大戦だった。1914年6月28日の「サラエボ事件」を契機に火を吹いた戦争の嵐は、瞬く間にヨーロッパの人々の関心を奪った。自国のすぐ右はオーストリア、右上はそれと同盟を結ぶドイツと国境を接し、左はそれらの敵となったフランスと接しているスイス人も、いかに自国が中立国とはいえ、安閑としていられるはずがない。ましてや、

交戦国の人々に観光・保養のためにルザーンに行くゆとりなどあろうはずがない。5年にわたったヨーロッパ第1次大戦は、1918年11月11日の休戦条約の調印でようやく終わったが、それまでに数多くの人間の努力を破壊した。ルザーン国際戦争と平和博物館は、その一つだった。

《表2》
1910年～1919年の年間来館者数

年度	来館者数
1910	18,426
1911	30,799
1912	35,231
1913	37,206
1914	19,037
1915	6,869
1916	8,006
1917	5,443
1918	記録なし
1919	記録なし

- 注(10)筆者の1997年の実測による。1909年の年次総会報告書(Bericht)には、「第二博物館」の広さは2,500m²と書いてある。これは、恐らく、裏庭など何も建っていない部分を含めた土地全体の広さであろう。
- (11)ルサーン市史料保管所の係官の説明による。
- (12)ルサーン市議会(Stadtrat von Luzern)決議第2434号参照。

本稿は、1997年度札幌学院大学研究促進奨励金による成果である。

(つばい ちから 人文学部教授 平和学専攻)

SUMMARY in English

This article will attempt to reconstruct the buildings, the exhibition places and part of the exhibits of a museum that existed about a hundred years ago in Lucerne, Switzerland, the International Museum of War and Peace. In retelling its history the “first” museum, built in 1910 and existing till 1909 but now buried in history, will be focused on. Also to be touched upon is the “second” museum that moved from the “first” in 1910. Although it disappeared in 1919 the building still stands today. With the aim of verifying its historical existence this article will make use of a number of photographs and charts made from that era, with the permission of the Stadarchiv Luzern and other related institutions. This in fact differentiates this article from ‘The International Museum of War and Peace (*Schweizerische Zeitschrift für Geschichte*, Vol. 31, pp. 185–202)’ of 1981, an article by Dr Peter van den Dungen, peace historian in the U. K., which documents in detail the history of the Museum from its beginning to its end. The present writer hopes that this article can complement the precursory work.